

# 学道一如

発行 小樽双葉高校  
生徒会通信  
2024年10月28日  
第43号

## 小樽再発見⑭ 石炭と人の歴史

### 石炭の積み出し港として発展

10月5日から連続講座「北海道の自然・歴史が形作った小樽を考える」(似鳥文化財団主催)が小樽芸術村で開催されている。第1回は「北海道の石炭と人々のかかわり」と題し、青木隆夫氏(『北海道史(現代史)』編纂委員会専門員)が講演された。北海道の石炭、炭鉱の歴史と人々の生活の変遷を豊富な資料で提示された。



増加する石炭輸送への対応で建設された高架棧橋。明治44年(1911年)竣工。長さ289メートル、海面からの高さ19メートルの巨大な木造施設で、じょうご状の設備を使って貨車から貨物船に石炭を流し込んだ。(撮影:大正時代、小樽市総合博物館)



高架棧橋と石炭積み込み中の貨物船。この構造、大きさの高架棧橋は、室蘭港にも同時に建設された。高架棧橋は昭和19年(1944年)まで稼働後、解体された。木製のための腐朽、戦争末期の空襲目標となることを避けた、など理由は諸説ある。海中に打ち込まれた基部は昭和30年(1955年)ころまで残っていた。(撮影:大正時代、小樽市総合博物館)

→三笠弥生藤枝町の炭鉱住宅。干しているのは大根。昭和36年ころ(三笠市立博物館)

この時期から北海道の炭鉱は次々と開発され、鉄道国有化後の明治39年以降大正期にかけて、三井、三菱などの旧財閥系炭鉱が進出するようになった。

青木氏は講演で石炭と人のかかわりを多面的に示され、中でも「炭鉱の暮らし」、右写真のような炭住(長屋)、浴場や劇場・映画館などを備えた共同社会を写真や映像で提示された。

**幌内炭鉱と小樽**  
明治政府は蝦夷地開発を国家的事業として位置づけ、明治2年に北海道開拓使を設置し、開発計画を進めた。炭鉱・石炭資源開発は中でも重点事業とされ、地質調査を基に明治12年に幌内炭鉱(三笠)が開坑された。同時に石炭の積み出し港となる小樽の手宮・幌内炭鉱間はその輸送手段として幌内鉄道が敷設され、明治15年に開通している。

幌内炭鉱の出炭は明治16年から始まり、九州の高島、三池の官営炭鉱と並ぶ洋式大規模炭鉱であったが、明治22年に北海道炭礦鉄道会社(北炭)が創立し、



官営事業に終止符が打たれた。

【振り返り】道内のほとんどの炭鉱が閉山されて久しい現代において、石炭産業とそれを支えた人々の生活や文化を記録・保存・検証することの意義について考えさせられる場となった。慶応大学が資料収集していることも知った。

### 双葉の郷里

報恩講で「Pay it forward」がありまして。三人に親切をして、親切にされた人は他の三人に親切にする、そうすると三倍ずつ親切が増えていって最終的に世界が平和になるのではないかと、いう計画を実行した少年の話です。

この映画から「Pay it forward」という言葉が「次へ渡せ」という意味で認識されるようになりました。

この話から学べたことは、恩に報いるとは、ただ感謝するだけではなくて、貰った恩を誰かに引き継いでいくこともしなくて、三井、三菱などの旧財閥系炭鉱が進出するようになった。

青木氏は講演で石炭と人のかかわりを多面的に示され、中でも「炭鉱の暮らし」、右写真のような炭住(長屋)、浴場や劇場・映画館などを備えた共同社会を写真や映像で提示された。

みなさんも身の回りの人に親切にして、少し格好つけて「Pay it forward」と言ってみると、世界が少し平和になるかもしれません。(大塚翔太)